壱岐の「ソヤ」

――蜑の移住伝承によせて――

山田直巳

はじめに

壱岐の「ソヤ」[1]は、現状で見るかぎり壱岐島全体に広がっているわけではなく、壱岐四町（石田町、郷ノ浦町、芦部町、勝本町）のなかでも石田町と郷ノ浦町に限定される。その石田町も現在確認できるのはそう多い数ではなく、集中するのは郷ノ浦町渡良浦小崎であり、この小崎の特殊性が際立つ。

『遺稿・郷土史わたら』[2]（竹下力雄）によれば、

小崎浦

豊臣秀吉朝鮮征伐の時、水先案内者として海上に熟練せる筑前鐘崎の漁士を従事せしめ、その功により帰途小崎浦を与え、居住を許し、尚、壱岐沿岸一円の鮑採取の漁業権を付与せりという。今尚豊太閤に謝恩のため盆の十五日には公方念仏とて、浦中の人集まり念仏を唱う（pp.47）。

とあり、文禄（一五九二）慶長の役をここに想起させるものである。[3]あるいは、

小崎浦――家六三戸辰巳向、浦人いえらく此浦より左たらんひらばなに至り海底方五四間に名石あり、その形勢大白の八重菊のごとし国人菊花石という。旅人船上より見て金敷と称すならん。この浦の海士毎年五月下旬より八月まで鮑を取り長崎御用の小旗を立て、多くは風本瀬戸の赤瀬、渡良の大島の後根滝などという所にて取る。海底に入ること拾尋以上十一、二尋、海の底のころび石をうね、はえをそねという。鮑金長さ一尺四寸五分（下略）……（pp.46）。

と海士による長崎御用の鮑かきをしたことを記し、また、

この浜には昭和の初め頃まではイルカを追い込んで捕かくしたものである。小崎浦の鯛網船四・五十隻が郷ノ浦港口よりイルカを宇戸湾に追い込みシャカの浜に追いつめ生けどりするさまはめざましく、浜の小高い所に大太鼓を打ちならし（時期は十一月～十二月頃）雪もよいの寒い時で毎年の如く同時期にこの捕物陣が展開された（pp.46）。

と、イルカの追い込み漁がおこなわれたことを記していた。

また渡良は流人の地ともいわれ、

文政十三年（一八三〇）平戸の藩士竹内三六壱岐に流刑。渡良に留まり渡良の野本家にいた。文武両道のたしなみあり。また謡いをよくしこれを渡良の人に教えた。後死して渡良に葬る。（中略）その人の罪状によっては、島の島である渡良の三島（大島・長嶋・原島）に渡された。遠流の刑に処せられた人は、武士、僧侶、役人等の学者、知識階級の人が多かったので、農業の手伝いなどをしながら学問のない村人たちに学問の道を教え、一般庶民からはひそかに尊敬され、又その土地の文化の移入に影響したことは否めない事実であった（pp.54）。

とある。安藤卓助、僧覚論、竹内三六等の具体的な名前も、竹下力雄氏の努力で今に伝えられている。なお、これらの一部は、『壱岐名勝図誌（中）』巻之十四[4]に詳述され、少なくとも江戸時代にはこのような伝承が定着して

いたものと思われる。

また、福岡県鐘崎、三重県伊勢との交流・移住伝承も、小崎（郷ノ浦町）・八幡（蘆辺町）の蜑に関わってしばしば語られるところで、これら民の移動移住は確かなものと伝承されているもののようである。すなわち小崎海士は鐘崎海事の伝統を伝え（「海上に熟練せる筑前鐘崎の漁士を従事せしめ」）、伊勢との関りを語るのは八幡海女であり、それぞれの伝統を伝えていると語られ、この度の筆者のフィールド調査（二〇一五年～一七年）でも確認したところである。ただ、その両者の相違は著しく、小崎海士は男性が潜り、八幡海女は女性が潜る。つまりは蜑の伝統も移住元の鐘崎と伊勢によって規定されていたともいうことができるであろうか。

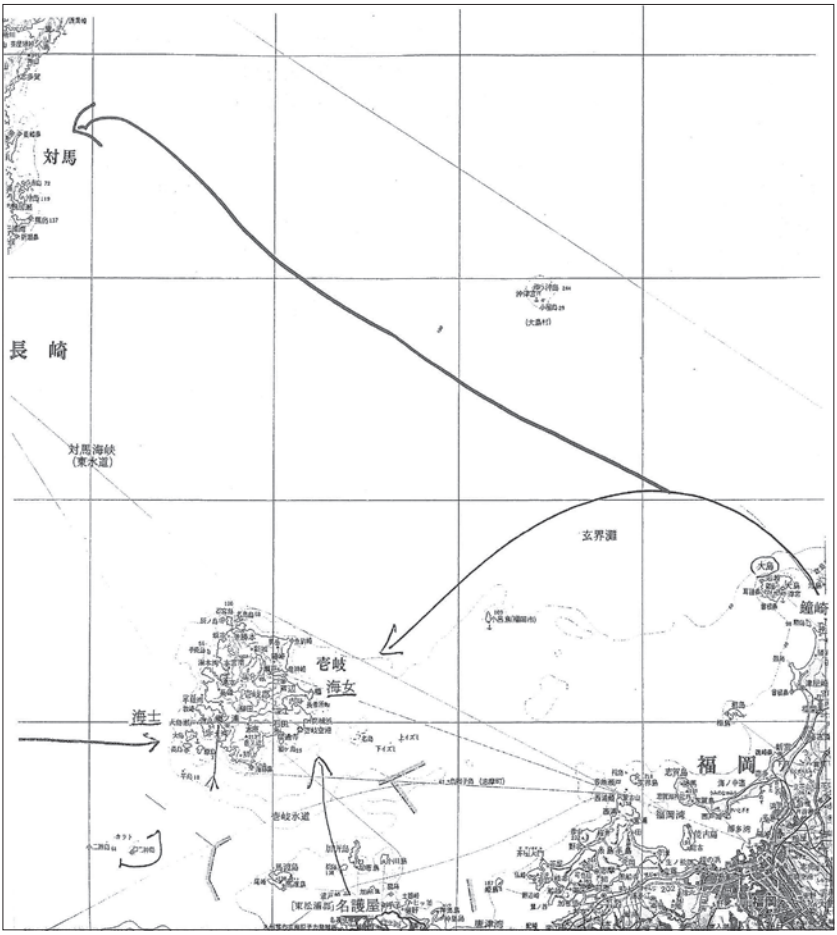
第一章　小崎および小崎蜑について

第一節　雑誌「島人」の語る世界

小崎について語るなら、何をおいても、山口麻太郎氏の雄編「壱岐の小崎蜑について」[5]を紹介すべきであろうが、それは次節に譲ることとし、まずは「島人（しまひと）」[6]という雑誌から話を始めたい。「島人」は、地元壱岐商業高校「郷土社会同好会」の生徒たちや顧問の先生方、そして壱岐を愛する方々の心寄せによって成り立っているが、調査とその報告は水準が高く、また心温まるものがあり、人々が伝承とどう向き合っているかが、よく伝わってくるものであった。例えば、「島人」第二号（昭和四十二年十二月一日刊）の「海女」（中田安穂さん執筆）と題する報告は次のようであった。

〔歴史的経過〕十三世紀に入ると曲（まが）りの海士が登場する。全国四十余の浦に海女の部落があり、対馬の曲り浦もその一に数えられている。曲りの海士の祖先が筑前鐘ケ崎（現在は鐘崎）から来たことは、疑いなし

39　壱岐の「ソヤ」



地図

としても、渡来の年代には異説があって、真相はつかみにくい。まず寛元三年（一二四五）、宗重尚が対馬鎮定の後、筑前の国与志井から高貴の方（安徳天皇）を迎え、その時鐘ケ崎からお供した海士をこの地に移した。「その三十七隻のうち七隻が残り、鴨居瀬と鶏知の高浜に船住居して残った。住吉に住するを上海士といい、高浜に住するを下海士という」という説で、しかも曲り部落にはその時の遺物と伝えられる物が秘蔵されている。さらに一説では、応永九年（一四〇二）宗賀茂の叛乱に七代貞重が筑前から兵を率いて来島のおり、武藤氏の船大将大曲氏が鐘ケ崎の船方を引き連れてきたのが、曲り海士の発祥であるという。前説はあまりにも神秘的な所が多く、後説は伝承としては面白いし、この説に拠る者があり、天皇供奉説も後世安徳天皇御動座説が起こってからの伝承であろうとするのは注意すべきことである。

船方はその後留まってこの国に住んだ。そしてその子孫は、州の海辺に住んで蜑となり、鮑を取ることを許された。宗氏が魚物を室町将軍家に進上したのは全て蜑の漁獲で、これが「曲り文書」にしばしば見える京進の公事なのである。

捕鯨業が興ると男は鯨とりに出かけた。春鯨が伊奈方面に現れる頃になると、イカやマグロを突いた技術を生かして遠征した。一方、女は干し鮑を長崎俵物廻にする必要から家船より陸上に移った。曲りの海女部落は、こうしてできた。鐘ケ崎が親村なら、曲りはその分村であり、枝村であった。

享保年間（一七一六～）以後、俵物が増大し、曲り海女の稼ぎは増えた。一方同じ流れをくむ小値賀海士は男が海に潜って魚をとった。この男海士は魚が主で磯物は従であった。この小値賀海士は旅海士（定着しない海士）と呼ばれ、主に西海岸で稼ぎ、冬は小値賀に帰ったが、この技術は地方に受け継がれ、ツツ、アレ部落には優秀な地方海士が生まれるようになった。彼らは深い海底の谷間に潜り、巨大なアラ、アコウ、イシダイ等を突いてくる。今もこの技術に優れた人がツツ、アレ部落などにいる。

曲りは海女部落として知られたが、もとは海士でもあった。水軍の船方として活動し、又鯨組のハザシ[7]（鯨

にモリを打ち込む人）として、勇壮な男ぶりを示した海士であった。（同雑誌pp.13～）

以上は、対馬調査の報告であったが、ここでの「曲り」と「小値賀」の対比は、壱岐での「八幡」と「小崎」の比較に対応する。いろんな意味で、まことに興味深い対比であった。

また「鴨居瀬と鶏知の高浜に船住居して残った。」という聞き取りは非常に重要で、蜑たちが陸上定住する前は、「船住居（家船）」であったという。「家船」といえば、『日本民俗事典』（弘文堂）もいうように「瀬戸家船」「崎戸家船」「幸ノ浦家船」「中戸家船」「樫の浦家船」など長崎県の沿岸を根拠地とする漂泊民を想起させるが、上記の対馬の曲（まがり）、壱岐の小崎、あるいは五島の笛吹などもこれに深く関係すると思われる。また鯨組のハサシも重要であった。以下にもしばしば話題になるように、「小崎のハサシ」は経済的にも文化的にも輝かしいポジションにあり、その呼称は賞賛の象徴そのものとしてあった。

執筆者（中田安穂さん）は、よく聞き書き調査を実施し、関係報告書などの文献探索も踏まえており、丁寧な記述ぶりが目立つ。特に異見、異説に対する評価に丁寧さがひかり、壱岐と対馬では様々な点で異なる部分があるのではあるが、共通する伝承もあり、その違いがクリアに捉えられている。インフォーマントとの信頼関係も十分なようで、微妙な部分の記述も実態を反映させる努力が払われているように読める。

「島人」第三号（昭和四十三年十二月一日）には「小崎の海士について」（長門恵子さん執筆）という報告が載っている。

小崎の海士は、今から三百年ぐらい前から始まっていたそうです。昔は海女だったのが、今は海士に変わっています。これは何時頃変わったのかいまだにはっきりわかっていません。今の小崎の海士たちは、だいたい五十人くらいです。年齢別に分けてみると、三十～四十台の人が一番多く、次に二十台、五十台の順に

なっていますが、小崎の海士たちは、今の福岡県のかね島というところから来たと言われています。小崎の部落のほとんどの家が漁業を営んでいます。他は大工、商業などを行っている家もあります。海士たちが沖へ出かける時は、もちろん自分の家の船で行きますが、船はだいたい二～三トン積で、一艘の船に三人または三人以上乗っていれば、仕事がしやすいそうです。

船の上での役割は、一人は船長（舵を取る人）、一人はローラーを操作する人（分銅〈どんぶり〉を上下する人）、潜る人と三人いるわけです。人手が足りないときは、農家の暇な人を雇って沖に行きます。

そして海士たちが沖に行くとき持っていく道具は、水中メガネ、潜水服（これは昭和三十八年頃から導入）、ベルト、ほこ、鮑がね、鮑やサザエを入れる袋（鮑袋）、釣り道具などです。

海士たちが沖に出かける時は、天気の様子をよく見てから出かけるが、雨、風が強い時、台風の時は沖には出ていきません。また時期によって昼の長さが違うので、夏と冬の出かける時間、働く時間が違います。夏は朝七時ごろ行って、夕方六時前後に帰ってきます。冬は八時ころ行って、四～五時ころ帰ってきます。鮑、サザエが取れる時期としては、冬が一番とれるそうです。でも冬は寒さが厳しく、海水も冷たいので、石油ストーブを持って行きます。前は炭火を持って行ったそうです。冬以外に寒い時も、やっぱり石油ストーブを持って行きます。

海士たちが海に入るときは、黒の潜水服を着て（前は裸で泳いでいたそうです）、水中眼鏡をかけ、ベルトをして、鮑がねを持って、鮑袋を首にかけ、五～二十五メートルの深さに潜ります。獲ってきた鮑、サザエなどは、漁業協同組合に売ります。一日のうちで一番獲れた時、お金にして二万円くらいで、獲れなかった時は二千円くらいです。（同雑誌pp.33～）

ここの記述で興味深いのは、かつては小崎も海女であった、つまり女蜑だったというのである。八幡蜑（芦辺町）

との比較を後述するが、現在では、小崎蜑は男性、八幡蜑は女性と一般的には言われている。それから考えると、この伝承は矛盾するように思われる。しかし、小崎蜑が筑前（福岡）鐘崎（かね島）からの移住にかかって成立したという伝承に従えば、『民俗学辞典』（東京堂）も言うように、鐘崎は女蜑で知られるところであるから、「かつて小崎も女蜑であった」との伝承は整合性がとれるように思う。あるいはしかし、聞き取りでも事情がはっきりしていないように、もっと別な因由が想定されるのかもしれない。

次に八幡海女についての報告を見よう。「島人」第四号（昭和四十四年十二月一日刊）に「八幡の海女」（下条加代子さん執筆）という報告がある。

八幡は壱岐の西側（芦辺町）にあり、二百二十戸の家があって、海女で有名な町である。海女は一年中ではなく、五月の下旬から十月の下旬の間で、約半年間、漁が行われる。海女には「オンアマ」、「女海女」（メンアマ）、「またコアマ」の三つがある。

三者は潜る方法が少し違う。

「オンアマ」……深さ二十三メートルまで、ロープに鉛を付けたものにぶら下がって、潜る。昔は（手で）引き上げていたが、現在はローラーで引き上げている。

「メンアマ」……深さ七～八メートルくらいの所を、桶を浮かし、それに綱を身体に巻き付けて潜る。

「またコアマ」……女の人、一人が自分の家の船で、人夫さん二人くらい雇って潜る。

オンアマとメンアマは海女船仲間で、同じ時間、場所で（の潜り）あるが、またコアマは海女船仲間とは離れ、自由にできる。

獲れる種類は、アワビ、サザエ、ウニ（赤ウニ、紫ウニ）、ガゼなどである。使用する道具は昔から変化がない。ウニ・ガゼを獲る場合は、「ウニカギ」を使用。大小あるが深さによって、使い分ける。「あわび」を

獲る場合は、「アワビガネ」を使用。「あわびおこし」ともいう。海女は小の方で、「またコアマ」は大の方を使用する。

海女の年齢は、若い人で十六歳、一番年上の方で、六十八歳であるが、収穫は若い人のほうが多い。海女の中で一番多いのが、十九歳～三十五歳の間の年齢の方である。この人たちは一般的に耳を傷めている人が多い。耳の保護のため、ガムをかんだ後を耳に入れて水が入らないようにしている。

現在海女・海士の数は、約二百五十名で、そのうち女二百名、男五十名である。この人たちの休日は、「お盆の四日間」「旧六月五日の祇園」「旧六月二十九日の海女祭り」の三回しかない。その他に海が荒れている場合だけで、比較的休日が少ない。船の数約二十艘（一艘に約十人以上）。オンアマとメンアマの人が分かれて乗る。

漁に出る時間は、

朝潮……朝五時～六時と普通より早く出る。午前七時頃～午後五時頃まで仕事する。

晩潮……潮が遅く引くため、昼より出かける。午前十一時～午後六時頃まで。

これらは潮の引き、満ちの状態によって、仲間との話し合いにより、獲る場所を変更させる。水揚げは一日平均三千円。半年間平均三十万～四十万で収入はわりに多いが、現在は昔と比べると少なくなってきている。しかし単価が高くなっているので、昔より獲れる量は減っているが、収入は同じくらいである。

海女さんとして一人前になるには、四年間はかかるそうで、潜る場所によって、どんなものがどのような場所にいるかを研究する必要がある。この四年間で上達しない人は先の見込みがないと言われる。

（同雑誌pp.24～）

この記述からも八幡蜑は海女、すなわち女蜑であることは明らかであろう。しかし、四分の一（五十名）では

あるが、現に男蜑も存在し、つまり海士も存在しているという他はない。小崎海士の所でも見たように、今現在小崎は男蜑、すなわち海士のみであるが、小崎にあっても昔の時点での女性の関与が語られていた。ということは、小崎であれ、八幡であれ、中心が海士か海女かということで、様々な変異が経過には含まれるということではなかろうか。

「島人」第十号（昭和五十年十二月一日）に「海神信仰のハラホゲ地蔵」（野本政宏さん執筆）という記事がある。次に一部引用してみよう。

地蔵信仰の厚い、この八幡浦は、長崎県壱岐郡芦部町諸吉本村触に所属し、島の東に突き出た八幡半島に位置している。古く伊勢からきて住み着いたというこの八幡浦は、現在戸数二百三十三、人口一〇九八人（男五二九人、女五六九人）で、オンナアマを主とする海人・網漁・運搬を業とする活気のある漁業の浦町である。

（同雑誌pp.61～）

ここでも八幡浦は、オンナアマと言っているように、海女の漁労をいっていた。古く伊勢からきて住み着いたとも言っているように、伊勢海女の伝統を引くもののように伝承されている。伝承によれば、ということであるが、やはり八幡蜑は海女によって代表されるということになるのではないか。上にも述べた通り、海士（男蜑）が絶対的に排除されているわけではなく、「オンナアマを主とする」という言い方（定義）に落着することになろう。

次に「島人」第四号（昭和四十四年十二月一日）に「小崎海士の信仰」と題する報告（長門恵子さん執筆）があり、以下に引いてみる。

○一年の初め、一月二日は「でぞめ式」といって沖にはいかなくて、近海に出て行ってすぐ戻ってきて船にジャガイモ、ニンジン、ゴボウ、サトイモ、コンニャク、トウフ、餅などを煮てあげて、神主さんに拝んでもらう。

○旧の六月十五日には、昔海士さんが沖で何か不意の事故で、水死されたという言い伝えがある。だから、この日は沖に出て行かない。

○十月三十一日を過ぎると、冬季の休みになり、神様参りに行く。（祈願ほどき）

○昔、船から海に飛び込むとき、初大神宮さん、瀬の神さん、宮地獄さん、男獄さん、金毘羅さん、にってん（太陽）、がってん（月）、ポイッ、しやせよう（たくさんとれるように）、といって飛び込んでいた。

○一舟に潜る人が二人以上乗っていたので、先に潜った人が、後から潜っていく人とぶつからないようにするため、後から潜っていく人は船端を叩いてホィッと合図してから飛び込んでいた。

○櫓を押して沖に出ていたころ、その櫓が瀬にぶつかると、海に綱の切れ端か何かを投げ込んで断りを言っていた。

○親戚に不幸があった場合、神様に参らない間は、小浜（瀬の真ん中に砂がある所）の近辺を潜ってはいけない。

○船の上で四つ足のついた動物の話をしてはいけない。（同雑誌pp.42～）

小崎の特徴として上記のような禁忌を含む様々なタブーが語られているわけで、小崎が他の地区と違う民間信仰的要素を含み持っていたということができるのではないか。

次に「島人」第七号（昭和四十七年十二月二〇日刊）の「渡良合宿紀行[8]」を紹介したい。その中で「伝承」の項に記された記事は非常に興味深い（武田とよ子さん執筆）。

小崎部落の翁、川辺音之助氏（六十八歳）を訪ねて昔から伝わる伝説を話してもらった。その伝説は次の如し。

◇みこしかつぎ

昔、お祭りの時、農業を営む麦谷触の人と漁業を営む小崎浦の人がけんかをした。そして、麦谷触の人が勝利を得たが、いつも麦谷触の人には、みこしを担がせなくて小崎浦の人が、みこしを担いでいたものだから、麦谷触の人がみこしを担ごうとしても、神様が乗り移らなかった。だから、小崎浦にみこしを担ぐように頼みに来た。そうすると、神様はすぐに乗り移った。その理由は、小崎の人たちが海水で体をいつも清めているからだ。いいかえると、小崎の人たちは、こやしをかぐような、下（しも）のことをしなかったので、自分たちの方が生活上、麦谷触より良いというような誇りを持っていることであろうか。（同雑誌pp.60～）

ここでは農業と海士の漁業との対比が描かれる。そしてより神に近く親炙するのは、海士であるとする。その理由を、下肥を扱う農業とカズク業である海士の対比に求め、下肥を汚穢と捉え、海に潜り日々、身を清めている小崎の海士を清浄とした。この対比で、清浄な身体の海士は神に親炙し、神と相性が良いので、神が乗り移って神輿を担ぐことが可能になったと説く。神に選ばれた民という、特有の選良（エリート）意識を読み取ることができる。ここには、木地屋（惟喬親王の勅許状）、またぎ、踏鞴師などといった漂泊民社会に見られる、他と別して許可されたといったもので、一種の信仰的ともいえるエリート感覚であろうか。小崎蜑の特権性をもう一つ。ふつう鮑を獲ってもよい場所は、各人地域的に限定されているが、小崎海士は太閤秀吉の俵物許可状があるので、どこでも獲ってよい。

「渡良合宿紀行」の記事にもう一つ「墓地」の記述がある（大畑裕美さん執筆）。

小崎部落の墓地は、部落の北東の方向の丘の上にあり、密集している。触では、個人個人の墓地であるが、ここでは、他の浦と同じように小崎だけの共同墓地である。墓地は背を東の方に向けていて、納骨堂などは全くなく、古い墓が多い。ふつうの墓との形の違いを言えば、木で造られている家の形をした墓がある。小崎浦の墓地は、江戸時代の海士の墓であり、鯨組のハザシとして、また、水夫の墓でもある。これらの墓地を深く調査することによって、もっと、もっといろいろなことがわかるかもしれない。（同雑誌pp.64）

古い墓とは、「ソヤ」のことで、「木で造られている家の形をした墓」とあり、江戸時代の海士の墓だとも言っていた。つまりこの生徒には、もはや「ソヤ」は見知らぬ墓上装置であり、前代のリアリティーはすっかり失われていた。しかし二〇一七年三月、真新しいソヤが設置され、そこに詣でている家族に筆者はたまたま出会った。伺えば、半年ほど前に亡くなったとのことであったが、家族は大阪に住んでいるとのことである。つまり二〇一七年現在もこの共同墓地は同じ場所にあり、普通に用いられている。墓地は家並みの二階屋根よりもはるかに高くテラス状に広がっており、村の中を車で走っても、切り立ったこの高台の上に墓地があるとは気づかなかった。

なお、この共同墓地の陸側はほとんど石塔墓で占められ、非常に立派なものが多い。「ソヤ」は海側に広がり、草生してあまり手入れされていない印象であった。

「渡良合宿紀行」のもう一つの報告「和泉屋　ヒゴ屋」をみてみよう。ここには海士と両家との関係構造が語られる（末永隆之さん執筆）。

渡良浦に居を構えていた和泉屋は「いずも」から来た武士であり、またヒゴ屋は「ヒゴ」からきた武士であった。

この両家は小崎浦の人々にとって、なくてはならない重要なものであった。それには小崎浦の人々は海士

だけで生活しているために、この両家の海産問屋から海産物を買ってもらっていたが、浦の人々は、和泉屋から買ってもらうもの（和泉屋ブシ）とヒゴ屋から買ってもらうもの（ヒゴ屋ブシ）とがあったが、和泉屋から買ってもらうものが大部分であった。小崎浦の人々はこの両家を親方・殿様と呼んでいた。また渡良浦の人々にとってもこの両家は重要な役割をしていたそうだ。

現在では、和泉屋は屋敷跡が残っており、丘の上には墓がある。またヒゴ屋は今もなお屋敷に住んでおられる。（同雑誌pp.65）

とあって、小崎が特殊であることの一つの側面を照らし出すものであった。小崎には耕地がなく海士に特化し、海産品に生活の糧を得ていた。その結果、海産品を捌く、いわば商社的役割をヒゴ屋・和泉屋に頼ることとなり、その結びつきが必須のものとなったのである。この話題は、山口麻太郎氏も繰り返し論じられたところで、伝承との間に興味深いかかわりを示している（後述）。生徒の聞き書きもなかなかに興味深い。

さらに「渡良合宿紀行」には興味深い報告が載る。「浦の有名人」（武田とよ子さん執筆）で「ハザシ」が書かれていた。

小崎部落で有名といえる人、それは佐野屋吉之助である。今はもう亡くなって、いらっしゃらないが、小崎浦で最も有名なハザシであり、又海士であった。佐野屋には、昔クジラ包丁があった。海豚のように上手に泳ぎ、クジラ包丁で、クジラの鼻を切り、ロープを通して綱に括り付けた人といわれる。小崎で二分間もの間、海中に潜る息の長い人はいない。呼子と壱岐間の海中に三十三ピロも潜り、海底より砂を取ってきた人であるので、「クジラぐらいの息の長さがあった人」と呼ばれている。この話をされた川辺音之助氏（六十八歳）も吉之助と同じ船に乗って、鮑獲りをしたことがあるといわれた。（同雑誌pp.67）

小崎の特色というか、個性というか、小崎が特徴ある地点として輝いていた時代の職が鯨組であり、明治初期に至る歴史があったことは既に八九頁で述べた。また捕鯨業の歴史に関しては、竹下力雄氏『郷土史　わたら』に詳細がある。

以上、雑誌「島人」を見てきたわけであるが、ここに展開された世界は、筆者のこの度のフィールド調査（二〇一四年～一七年）を凌駕するものも少なくなかった。もちろん重ならない部分もあったが、「島人」第一号が昭和四十一年（一九六六）に刊行されており、真摯な壱岐商業高校「郷土社会同好会」の会員の生徒諸君、指導に当たられた先生方、そして地域の心寄せをして下さる方々といった、いわば三位一体がここに素晴らしい成果を上げていたということである。また、ほぼ五十年前という当時のリアリティーも捨てがたい。まだ小崎を含む渡良浦、郷ノ浦町、ひいては壱岐島全体の民俗が、それなりの実感を持っていた時期であったということである。そして何より、当地に生活する若い人々による調査であることが強みであった。雑誌「島人」の世界は、まさにその時代、雰囲気、社会を映す鏡でもあったのである。ここから当時の様々が読み取れる。

第二節　山口麻太郎氏「壱岐の小崎蜑について」

山口麻太郎氏は、壱岐島を離れた時期もあったが、ほとんど生涯にわたり壱岐での民俗学研究に従事し、柳田國男や折口信夫などと深く交流し、壱岐の民俗文化研究を深化・追究・展開された民俗学者で、まさに壱岐のプロフェッショナルとして、われわれの敬仰おく能わざるところである。

さて、論考「壱岐の小崎蜑について」（「社会経済史学」第三巻第二号、昭和八年五月刊）の冒頭は、なかなか衝撃的な言葉から出発する。

壱岐には小崎（渡良村）、八幡（田河村）の両蜑が、別々に部落している。八幡蜑は伊勢から来たと言われ、小崎蜑は筑前の鐘崎から来たのだと私は聞いた。折口氏は小崎蜑は筑前の志賀島から来たものであると記されているが如何か。八幡蜑は女が主として潜るのであるが、小崎蜑は男ばかりである。小崎にももとは女蜑もいたらしく、かすかに記憶されてはいるが、それは極めて稀な例であったらしい。八幡蜑は次第に向上して、今日では真に自力更生の曙光を仰いでいるのに反して、小崎蜑ばかりは年々減って来る漁獲高と次第に発達して行く遠海漁業、機船漁業に取残されて、よくても酒、悪くても酒、ただ酒ばかりの中に、百年一日の惨めさを嘗めている。村の当局からはその更生どころか一の厄介者として冷視され、村の人々からも小崎者として賤しめられ村の癌として嫌われている。（pp.139～、以下頁は、山口麻太郎著作集第三巻。以下同じ。）

ややびっくりする評価で始まるが、そこは壱岐を愛してやまない山口氏であるから、当然しかるべき方途がとられるのである。しかしそれは安直な処方箋などではなく、「その更生策を説いたり、八幡蜑と小崎蜑とを比較してその相違の因って来るところを論究しようとしたりするのではない。その双方の認識を完全にする事によって、それらの問題は自ら氷解せられるべきものであろうかとも思うのである。」と根源的な問題を問うことから始発すべきだと言っていた。

以下、山口氏の見解を紹介しつつ、雑誌「島人」をも念頭に、壱岐の伝承の実態に迫ってみたい。

【小崎の経済】

山口氏が述べているのは、昭和八年段階の状況であるが、当時小崎は経済的に振るわなかったという。その一つの理由を耕作すべき土地を持たないことに帰していた。全六十四戸のうち「なにがしかの土地を所有している者が二戸あるが、いずれも小作に付していて、前記十人組二組を除いては、副業としても農業を営む者はない。」

（pp.141）とある。そしてその遠因は、藩政時代の「蜑には土地を与えずして沿岸の漁業権のみを与え、百姓には土地を割り与えて漁業を許さなかった。にもかかわらず在の者は農業をしてその余暇には盛んに漁業をやった。」（pp.157）という。これでは、小崎蜑が次第に貧しくなっていくのは当然である。この藩政の歪んだあり様が小崎と近隣との争い、しばしばの喧嘩騒ぎのもととなり、結果として小崎蜑を近隣から孤立させ、特殊視させる遠因となったというのである。ことの歴史的当否は別として、そのように山口氏も聞いているということであろう。

【生業構造の変化】

このほかに、生業の構造変化の問題があるという。「小崎蜑も明治初年頃までは、冬春は鯨組に行き、夏に海士を稼ぎ、秋にはセモンウチなどをやった。鯨組が廃絶してからは、冬が閑であったろうが、やがて大羽鰮の刺網がこの期間を埋めることになった。しかし、それも長くは続かず、近年大羽鰮の不漁は刺網の全滅を招来しつつある。鰤の飼付けも冬季のものであるが、網代権が売却されているのと、それでなくても近年の飼付の不漁は休業の余儀なきに至らしめたであろう。」（pp.144）という。

また現代的経済機構に絡まる問題もあったという。「刺網の衰退には、単に漁獲収入の減少や労力の過剰ばかりでなく、もっと大きい現代的な経済機構にからまる問題があった。刺網は一帖に数百金を要する一種の投資であった。従来全く事業的、投資的に訓練された事のなかった蜑が、変動の最も激しい漁業に投資したものである。それも商人たる魚問屋、肥料製造家と特殊契約のもとに資金を借りたのである。危険は事前に明白だったと言ってよいであろう。」（pp.147）という要因も加わったのである。

【両家と小崎】

またさらに小崎蜑と渡良浦のご両家〈肥後屋（大島姓）と和泉屋（中山姓）〉との従属関係の問題があるという。

雑誌「島人」の項でも触れたが、小崎は純粋な蜑集落であるが、渡良浦は浦庄屋のあったところで、農家、商家、漁家の混合集落で、蜑だけの家は一軒もなかった。地理的に言うと、実は、小崎浦と渡良浦とは、渡良湾という一湾の中の相隣する両入江の小集落であり、まさに徒歩十五分ほどの距離であった。しかし、「このご両家と小崎民との間には、昔から特別な関係があった。漁獲物の斡旋や金品の前貸しなどする点からいうと、漁師と問屋との関係であるが、子供が生まれると両家に一々届けて名を付けて貰い、祝い酒を貰う点は、親子の関係でもある。また両家にはオヤジの任命権があり、諸種の施設や事業についても唯一の采配者である。小崎の者も両家に行っては、皆閾の所に蹲って物を言い、今でも両家の前を通るときには我々が神社の前を通るときのように頭を下げて通る。これらの点からみると、主従の様でもあり、治者と被治者との関係の様にも見える。」（pp.148）と。

【家船と定着】

また「小崎蜑はもと家船であったのだが、どこにでも死体を埋めて困るので、小崎の地に墓地を与えた。それ以来今の処に土着したのだという。（中略）太閤の朝鮮征伐の折、水先として筑前鐘崎と肥前名古屋とから連れてきた蜑であったが、帰途壱岐に土着し、その両方の地名から取って古崎といったものだという。」（pp.148）とある。現在の用字は、「小崎」。

「小崎浦には大きな榎が一本あって、その側に浦にただ一つの大なる共同井戸があり、その井戸の側に小さな社殿が建ててある。榎の根元にも、何かの祭り場所があったらしく、こぼれた石祠が土に埋まっている。（中略）水量の豊富なこの大井戸を中心に、家船の蜑が土着したもので、その時以来の水神がこうして祀られているのではあるまいか。（中略）氏神様は、村中一社の村社、国津神社である。この神社はもとシカの辻にあったアラハカ様というのを移し祀ったものである。このアラハカ様は甕に入って（ある人はうつろ船にといった）神田浦に漂着し、渡良浦に上られたのを高所がよかろうというので、シカの辻にお祭りしたのであるが、ここは対馬から肥

前の方をずっと見渡す高所で、沖を通過する船は帆を一段下げて、このアラハカ様に敬意を表さねばならなかった。（中略）国津神社の祭典には必ず小崎の者がお神輿かきとして奉仕し、他にオカケミを奉じた者が、二人参加した。海人を司るいつしき神なるが故に小崎蜑もこうして崇敬するのであろう。」（pp.152）。

江戸時代、小崎の干鮑は、長崎の俵物役所に集められて幕府の対外貿易品として重要であったという。また和泉屋・肥後屋は鮑の建値について小崎蜑から不満が出たので、自由販売としたところ、販売に訓練されていない彼らは、八幡蜑に完全に食われてしまい、再び両家に頼ってきたことがあるという。昭和八年現在、八幡蜑に生鮑を売って、干し鮑の製造は減少傾向にあるという。

【小崎蜑と捕鯨】

「小崎蜑の全盛期は、捕鯨の全盛期にあったかもしれない[9]。壱岐の捕鯨の盛期は、弘化（一八四四―四八）・嘉永（一八四八―五四）を最後として、以来次第に衰運に向かい、明治十年過ぎには断絶している。捕鯨のハザシは、小崎蜑に限られ、一組にオヤジ、二番、三番、四番、五番の五人がいた。浦上での一切の指揮権は、このオヤジにあった。ハザシは網を被って自由を失った鯨に、間近く漕ぎ寄せて、銛を打ち剣をもって急所を突き、又海に潜って鯨に網を掛けなどするを任務とした。（中略）その漁期は冬から初春にかけての三、四か月で、その間はハザシの外に舟子としても小崎から四五人もいったというから、浦中賑わったとみてよい。ハザシのことを「三月さむらい」という諺があったことから推しても、その豪勢さが思われる。漁期三か月間は、武士のような威勢を示したということである。ハザシは一人毎に草履取が付いており、船の上下にも自らは足を濡らさず、人に負われてしたということである。」（pp.157）。

小崎の特殊性は、実に様々な観点から捉えることができるが、第一節で点検した雑誌「島人」の世界と比較してみて、伝承の濃淡、詳細と簡略という差異はあるものの、山口麻太郎氏の述べるところと大なる相違は見出さ

れない。つまり昭和八年段階と、昭和四十年代（雑誌「島人」の記事）とを比較してみて、様々な意味で大枠としてかなりの点で重なっていた。第二次世界大戦をはさみ、社会の激変をここに考慮しなければならないが、小崎という限定された地理空間、社会を見た場合、基礎的伝承には大きな差異は見出されないということではないか。しかも、調査・整理した一方は高校生であり、他方は専門の民俗学者である。視点の違う両者において大枠で重複するということは、「伝承としての小崎社会の基礎的あり様（構造）」がここに、ほぼ固定していたということではなかろうか。

第二章　九州の葬送・墓制からみる「ソヤ」

九州七県を見渡してみると「ソヤ」等一連の墓上装飾は、一時代前までは全県で普通に用いられていたようである。そこで、以下にその状況を簡略に点検してみたい。要するに九州には様々な墓上装飾があることがわかる。つまり、九州全域でのあり様を点検してみると、ここから壱岐、対馬、隠岐へと展開するソヤの方向性が見えてくるのではないか、と思われる。

『九州の葬送・墓制』（昭和五十四年・明玄書房刊）は、この問いに適切に答えてくれる。以下同書によりつつ、県別に簡略に点検していきたい。

・福岡県

「アコヤ」といって、埋葬場の上に屋形を据える習わしは、ほぼ筑前全域に見られたといっていい。しかし早いところでは明治期からすたれたところもあり、なかには戦後でも散見することがあった。（中略）残島の（例で）は、藁と竹と細い木とで作られた三尺ぐらいのもので、内に位牌や卒塔婆を入れたという。一年ぐらいそのまま置いていたともいうが、なかには朽ちるまで置かれたものもあった。葬式のときに持って行くのが普通だったが、

玄海島では初七日に立て、初盆に取り払うものとされていたとのことである。」（pp.61～、以下頁は『九州の葬送・墓制』）

・佐賀県

「ヤカタ・イタヤネ・ガン　形の上からもはっきり喪屋の遺風と思われるのが、唐津地方でヤカタ、上場地方でイタヤネ、小川島でガンというものである。これはヤカタの名の通り、霊魂の籠る屋形（館）であり、屋根や壁を板で作った小屋であるところからイタヤネとも呼ばれる。ガンはおそらく龕（仏像などのいれもの）の字音であろう。葬式のとき棺とともに運び出し、埋葬が済めばこれを土盛りの上に置き、位牌や水茶碗・香立てなどを入れて扉をしめる。」（pp.98）

・長崎県

「土葬のころのタマヤは三尺方、高さも五、六尺くらいもあって、風に飛ばされぬように針金やロープで繋ぎつけたりしたものである。火葬になってから合同墓となり、タマヤも五〇センチ方、高さも六〇センチくらいになり、それをマセの中に入れて担いで行くのである。」（pp.131）

「スヤのことを五島では、トマブキ（マセ）ともいう。神の所有する山の材で大工に作らせた。このトマブキは葬式の翌日に身内だけで、カブセル（置くこと）という。トマブキの上につけた木製の燕は、土中に埋める。それから坊主石と呼ばれる浜の石を積み、トマブキの台座を作る。それからトマブキをカブセル（置く）。トマブキは四角と六角の二種があって、金持ちの家が主に六角ガンを作るという。墓地は風が強いので、飛ばされぬように大きい石をのせたり、針金やロープで引っ張ったりする。トマブキの中には位牌・線香立て・ロウソク立て・茶・水・飯碗などを入れる。」（pp.137）

・大分県

「ヒヤ（霊屋（たま））は屋根葺きの人が小麦カラで作っていた。」（pp.157）

「上に置く霊屋は、ヒヤ（中津市湯屋・西国東郡真玉町など）・スズメドウ（宇佐郡・東国東郡など）・タマヤ・ウササヤ（大分郡湯布院町塚原）・カンオイ（直入郡直入町など）・ヤネ（南海部郡宇目町など）・カサ（大分市）などという。たいていは野道具を作るときに大工に頼んで作ってもらう。切妻造りと神輿造りが主であるが、国東地方では入母屋造りで、四隅に鳳凰をとまらせる。」（pp.184）

・熊本県

霊屋のことをタマヤ、あるいはヤギョウ（屋形）と呼ぶのが一般的である。県北の一部ではヒオイともいっている。（中略）霊屋の屋根の中央部に鳥の飾りをつける。孔雀、鵬、鳳凰である。（中略）屋根の四隅には燕をつける。家形の霊屋でない形式の霊屋もある。

二本の柱に横木を渡し、それの両側に屋根を付けたもので、イタヤネという（pp.233～234）。

・宮崎県

霊屋　タマヤ・ミタマヤと呼ぶ。真幸町では、イエ（家）と呼ぶ。村人の中で職業ではないが、霊屋を作れる人が作った。今では葬儀屋が準備する。屋根の構造から、切妻式の正面開き戸のもの、神殿造り（神社造り）で前方開き、円形屋根の寺づくりのもの、仏壇をかたどったもの、等と多様である（pp.288）。

・鹿児島県

タマヤ作りは、葬式組の人たちによって進められる（pp.318）。絵が描かれたタマヤもあるし（pp.344）、お堂のような湾曲した屋根に、正面に鳥のつけられたものもある（pp.346）。

以上、点検してきた名称を整理すると次のようになる。

ソヤ、スヤ、アコヤ、ヤカタ、イタヤ、イタヤネ、ガン、ネガン、ヒヤ、ヒオイ、ヤギョウ、タマヤ、トマブキ、マセ、イエ、スズメドウ、ウササヤ、カンオイ、ヤネ、カサ、等々。

九州だけで、これだけ地域差を含めた言い方、名称のバリエーションがあるということは、それぞれの地域で格別に限定した場の、大事な言葉であったことを示していよう。その地域の人々にとって特別に深く意味づけられた特殊な言葉、つまり死に関わる特別な場で生きている内容に対応している言葉（地域語彙）、ということになるのではなかろうか。

第三章　ソヤの構造と地域的変異

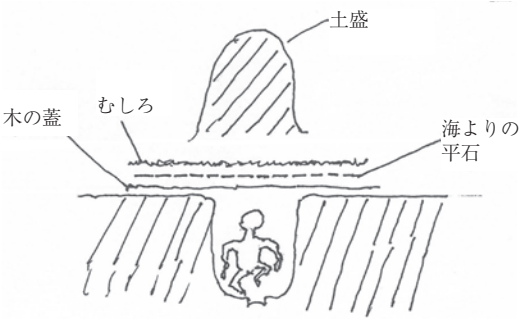
今現在の時点で、隠岐、対馬、壱岐の「ソヤ」を比べると壱岐のものが一番立派である。それは個人墓として作られるためで、壱岐でも小崎は共同墓地なので、対馬、隠岐の場合と同じである。壱岐の特徴は、単独墓として独自の敷地の中に作られるので、基壇の石積み、墓上装飾としてのソヤの規模も大きく立派となるのである。Kさんのご親戚の新墓を見せていただいたが、次頁のように作られている（写真A）。

この場合は、四尺（約一二〇センチ）四方に、高さは三尺（約九〇センチ）であった。石積み（写真Aのように、新しいものはブロック積みがほとんど）の中は、土であって、土盛りの周りに石を積み上げて、石垣を作るときの要領で作成する。石の積み方は丁寧に、面を整えてきっちりと積み上げる必要があり、完成した後石積みが緩まないように、番線を用いてグルリと締める。上面の中央部を長四角に十センチほどへこませる（六〇センチ四方）。そこに海から拾ってきた丸い石を置く。これは単独墓であるから番線で締め付けるが、共同墓地の場合は、ただ積んだままであり、強い海風、雨に曝され、また激しい寒暖の差もあるから、たちまちに緩んでしまう。上に乗せたソヤも（飛んでしまわないように固定されてはいるが）曲がり、歪みぐずぐずになっていく。

さて、海から拾ってきた石の下には、遺骸を入れた甕が入っている。その状況を断面図で示すと図Bのようになる（土葬の場合）。

遺骸を入れた甕がバランスよく落ち着くように、土にうまく収める。甕の上に木の蓋をし、その上に海から拾ってきた平らな石を敷き詰める。その上に筵を敷き、さらにその上に土盛をする。こうして出来上がった土盛全体を、石垣積み（ブロック積み）の要領で四角に石で囲み上げる。外から見るとすべて石で積み上げたように見えるが、作成順序は右の通りである。

写真Ａ　所在地壱岐市石田町筒城西触字泉
2年前お亡くなりになられた男性の墓。墓の方位は北向き、北側正面より（平成27年3月24日写）



図Ｂ

こうして出来上がった上にソヤを安置する。共同墓地の場合は、敷地が狭いので、このような規模のものを作成することは不可能で、二尺（六〇センチ）四方・高さ一尺といった小さなものとなる。場合によって、もう少し小さいものもあり、ソヤの幅いっぱいといった設置もある。また石組の中が土であるから、風雨に晒されれば、ぐずぐずになるのは自然のなせるわざである。

土葬の場合は、野辺送りでこの石組みの中に甕を納めるのであるが、火葬の場合でも葬式後すぐにお骨を納める。四十九日間は朝夕に詣で、夕べ―（カンテラに火を入れ）、朝―（カンテラの火を消し）、水・食事を供える。現在は、四十九日まではお骨は家に置き、その後に納骨する形式となった（この場合も前もってソヤ・基壇を作っておく）。

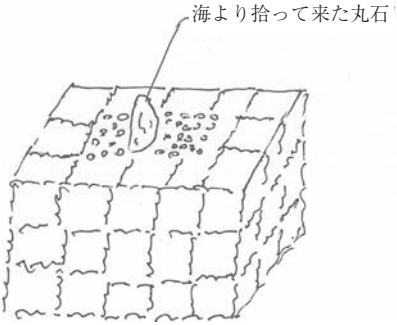
墓石を立てるまでのプロセスを示すと、次のようになる。

図C（石組みだけの墓）

←

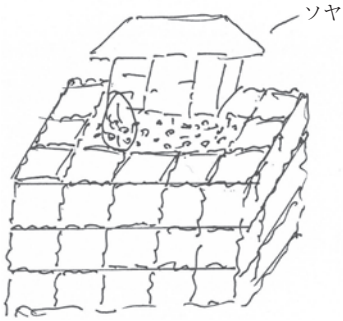
図D（ソヤを立てる）

←



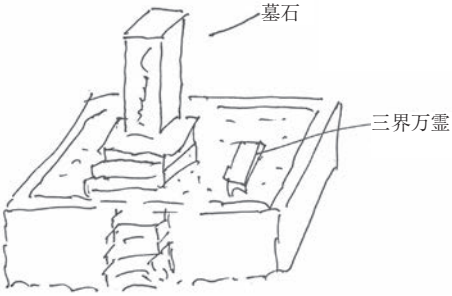
図C（石組みだけの墓）

⇩



図D（ソヤを立てる）

⇩



図E（石塔を立てる）

図E（石塔を立てる）

「ソヤ」はこのように墓上装飾として作成されるが、土葬の終焉と石塔墓の浸透によって、急速に消えていくということである。新規につくられる場合もKさんのご親戚のようにないわけではないが、「神葬祭の家は別として」、という条件が付くようだ。

隠岐や対馬のインフォーマントから聞き取ったような思いとは少し事情が変わってきているようだ。そこでは「時間がたち、ソヤが壊れ、死者への直接感情が薄れていく」と、「墓石を立てるかな」、と考えるようになる。そういった心のプロセスのバロメーターのようにソヤが壊れていく。つまり時間の経過が、ソヤの傷み具合として目前に現れるというのである。だから、ソヤは傷んでも修理はしない。その観点からすると、隠岐の西ノ島町で見たような頑丈な、本物の家のような造り（民俗学研究所紀要第四十集を参照）は、少し違うのかもしれない。しかし、そこには外来者としての当方からは思い及ばない心があるのかもしれないとも思う。

第二章で述べた九州七県の墓上装飾は、実に多様で驚くほどの変異を持っていた。そして名前も十五種類を越え、名前が違うということは、仮に類似の形を持っていても当事者からすれば違うものなのであろう。そういう観点からいえば、日本海島嶼のソヤはあまりに似ていたということになろう。壱岐、対馬、隠岐の共通性がここに見えてきたということでもあるのかもしれない。

結び

「ソヤ」という墓上装飾装置は、壱岐（長崎県）、対馬（長崎県）、隠岐（島根県）といった日本海島嶼地域に限定された葬法ではないかと仮説を立てたわけであったが、実は九州全県にまたがって普遍的に見られた墓上装飾であった。ここから想定されることは、黒潮に乗って人々が日本海を北上移動した、その経路にこの墓上装飾が

展開したということになるであろう。その展開は、九州各県―壱岐―対馬―隠岐という経路であるだろう。もちろんこの順番である必要はない。少なくとも九州全県から様々な経路をたどって日本海の島嶼の各々に伝播していったものであるに違いなかろう。それは方言の側面からも肯うことができそうである。

その運搬者は誰であるかという問いがここにはある。第一章で検討した蜑がその移動を踏まえて展開した結果ではないかと今は考えておきたい。

註

（1）成城大学『民俗学研究所紀要』の第四十集に、「日本海島嶼地域の葬送儀礼の研究―「スヤ」を軸に―」と題し、壱岐・対馬・隠岐の「スヤ」の現状について詳細な報告をした。そこでは、各島の現状を映像によって報告するとともに、周辺の環境をも踏まえ解説を付した。なお呼称の「スヤ」であるが、一〇五ページに様々あることを確認した。「スヤ」「ソヤ」の交替も地域によって互角に称せられており、どちらかに統一することができない。隠岐ではスヤが、壱岐ではソヤが正しいと地域分けすることはできそうである。

（2）『遺稿・郷土史わたら』（昭和五十一年八月十日・私家版）は、竹下力雄氏の遺著である。氏は、大正元年九月十二日、長崎県壱岐郡郷ノ浦町渡良に生まれ、帝国教育学会給費生として中等部に学び、苦学して早稲田大学通信教育文学部に学ぶ。判任文官特別任用試験合格。昭和十四年四月朝鮮総督府官吏。昭和二十一年七月長崎県庁、壱岐支庁、東彼北高地方事務所勤務。長崎県の総務課長など五つの課長を務める。昭和五十年八月二十八日逝去（享年六十三歳）。本著の巻頭には、山口麻太郎氏の「『郷土史渡良』の出版をよろこぶ」が載せられ、そこには、

旧渡良村は壱岐の西南端に突出する半島で、三つの小島を抱え、北には半城湾を作り、南には郷ノ浦港の外湾を形成し、対馬海流を正面に受けて珊瑚礁と浜木綿とあこうを自生せしめている。

この村には大小六十基の古墳があった。『海東諸国記』には、渡良・麦谷・船越の三港が摘出されている。対馬海流は南方諸島と北部中国・朝鮮半島とを結ぶ海上の路であり、この渡良村は重要な宿駅の役目をなしたわけ

であろう。

この村の鎮守は海の彼方から漂着した荒波加神であった。数艘の商船をもって海外に翔った大藤十郎左衛門末次は、伝説の人となりおうせているけれども、寄進の大蔵経は太平寺に現存している。巨人怪力の伝説人本岡渡良左衛門は腰掛石で親しまれているが、その佩刀は「身ノ長四尺三寸八分惣仕立長五尺一寸三分」と『壱岐名勝図誌』にある。本岡氏が西光寺に寄進した雲版は今尚華光寺にある。決して架空の人物ではなかった。

とあり、地形海流、海上交通を語り、鎮守の由来を説き、伝承となりおおせる人物を検証する。同著巻頭二つ目に著者の妻女、竹下チヨノ氏の「初歩の一曲」と題した一文が載り、著者の晩年が記される。本著は渡良を語るものであると同時に著者の渡良への郷土愛を語るものであった。

（3）注（2）書pp.54にも「朝鮮征伐凱旋の時中山次郎左衛門軍船の操縦に任じ功あり帰国の後、渡良に留まり商家になる。功を以て後年壱岐沿岸の採鮑業及乾鮑専売（支那貿易品）を許可せらる。渡良小崎潜水夫は当時筑前鎌崎の漁者にして次郎左衛門にしたがい海上の航送に任じ凱旋の後次郎左衛門と共に小崎に留まり主従の関係を保てる者の如し……。」とあり、豊臣秀吉の朝鮮出兵と結びつけ、小崎―鮑製品―潜水漁業が一連のものと記述されている。

（4）『壱岐名勝図誌（中）』（一九七五・名著出版pp.787）には、

小崎浦　辰巳向　家居六十三戸

浦人云、此浦よりたんひらばなに至り、海底方五十余間、名石あり。其形勢、大白の八重菊のことし。国人菊花石又は菊名石トモ。といふ。旅人船上よりみて金敷と称すとそ。

抑此浦の海士、毎年五月下旬より八月頃まで鮑を取、船にハ長崎御用の小帷を立。風本海の灘、瀬戸海の赤瀬、渡良の大嶋の後根滝なといふ所にて取といへり。串鮑製作の為也。海底に入事、十尋以上十一二尋計、（鮑取の鉤）如此長一尺四五寸位の鉄の鮑金といふ物を以、海底の石にころひ石をウネといひはへり。ソネといふとそ。居る所の鮑を一入に壱ツ或は三ツ四ツ一息の間なり。取上るなり。実に折により息絶むとすることなとあるより、聞にもからきわさにそありける。

串鮑製作ハ、鮑の色白赤きを取り、貝よりはなし、板にふせ置、上を撫れハ、広くなるとそ。（以下略）。

塩煮貝製作の事
是ハ小生貝をおこし、二夜計塩につけ、其を海塩にていであらひて竹の串に横に五ツ宛指、五串つつ細縄にて両方組、日に干。（以下略）。

等とある。さらに、

本綿浦　未詳
続風土記云、昔田頭と云所に千戸ありし時、大藤十良左衛門と云長者、大小の船数艘作りて、日本ハいふに及ハす、支那までも商売する時、始て支那より綿を調来ハ此浦なり。故に其地を名つけて綿浦といふ。其着船の津を本綿浦といふとそ。

ともあり、ここが交易通商の拠点であって、新たな物品（綿）の取り扱いを始めると同時に海外にも雄飛していたと指摘する。

（5）『山口麻太郎著作集3〈歴史・民族編〉』（一九七五年・佼成出版社）所収。この論文は、「社会経済史学」の第三巻第二号に掲載されたもので、昭和八年五月執筆にかかる。ここに記される小崎蜑の有り様は、この時期のもので、現在とはかけ離れたものであろうが、山口麻太郎氏の壱岐を愛し深く思う熱情が吐露されている。これを解説した和歌森太郎氏は「歴史、民俗にまたがる論といってよく、彼らの村落社会機構や担当漁撈の多様さや、日常の生態が、これまたすこぶる具体的に描かれている。」（同著作集解説、pp.445）と、高く評価する。

（6）壱岐商業高校「郷土社会同好会」の機関誌として刊行されているものである。「島人」第一号は、昭和四十一年（一九六六）に刊行。なかなか充実した内容で、筆者は第十一号、昭和五十二年（一九七七）までしか確認していないが、指導（顧問）の先生がたの熱意と創意工夫が偲ばれる。

（7）注（2）著の一二九頁以下に、「小崎漁業部落と伝説」にハザシ関連の諸事が詳述されている。また「捕鯨業の歴史」についてもp.131に記述がある。

（8）「渡良合宿紀行」（「島人」第七号・昭和四十七年十二月二十日刊）には、「海士部落「小崎」調査」と大きく括られ、冒頭に松本浩二さんの次のような紹介がある。「壱岐随一の街郷ノ浦町。その一端である渡良半島の渡良浦、小崎

浦を中心に調査するため渡良西触公民館を宿泊地として三泊四日の予定で、調査することになった。壱岐郷土に関しての知識、部員のチームワークをモットーにし、これが何らかの形で有意義なものとなるよう願いたい。」

この後、七月二十一日から合宿調査が始まり、参加者が十三名で、先生が車で運搬するなど黒子に徹しておられる様子が記され、各自のテーマに沿っての調査、全員でのレクリエーションなどが紹介される。末尾に「これからもこのチームワークを続けていきたいものである」とある。壱岐商業高校の「郷土社会同好会」の昭和四十七年度の活動が目に見えるようである。

（9）竹下力雄氏は、「捕鯨業の歴史」について、次の様に記した（『遺稿　郷土史　わたら』）。

「壱岐に初めて捕鯨業が来たのは、明応二年（一四九三）で、日高吉弥という人が紀州熊野浦から瀬戸の夷浦にきて鯨突漁業を始めた。延宝八年（一六八〇）深沢儀太夫は鯨組を作り、崎戸、松島、平島方面に漁場を持ち、壱岐対馬、生月、五島、江浦、福岡まで漁場を拡大した。年間百頭以上の鯨を獲り、捕鯨業の長者となり、大村藩は儀太夫の納める運上金に左右された、という。時に寺院を新築献上し、壱岐では芦辺の竜造寺を規模を大きくして建立している。古歌に「うちかすむ壱岐のわたりを見渡せば鯨のいぶき立たぬ日もなし」と。当時の西海から壱岐対馬方面の海は鯨の潮吹きめざましく見えたそうで、いかに壱岐近海は鯨が多かったかが推測できる。ところが、弘化（一八四四～）・嘉永（一八四八～）にいたると鯨の回遊が激減し、安政（一八五四～）に至り、豪勢を極めた鯨組は落魄となった。」（pp.131）。

《謝辞》

壱岐の皆様には、大変お世話になりました。特にインフォーマントの皆様には、突然の訪問にも拘わらず、快く受け入れていただき、また立ち入った内容にも様々ご教導いただき本当に有難うございました。

取り分けご指導賜りました、喜多正様、鵜瀬守様、郷ノ浦図書館の司書の皆様には心よりの感謝を申し上げます。重ねて御礼申し上げるところでございます。

※本稿は、二〇一六・二〇一七年度、成城大学特別研究助成金の交付を受けてなされたものの一部です。明記して深謝いたします。

（成城大学社会イノベーション学部教授
民俗学研究所所員）